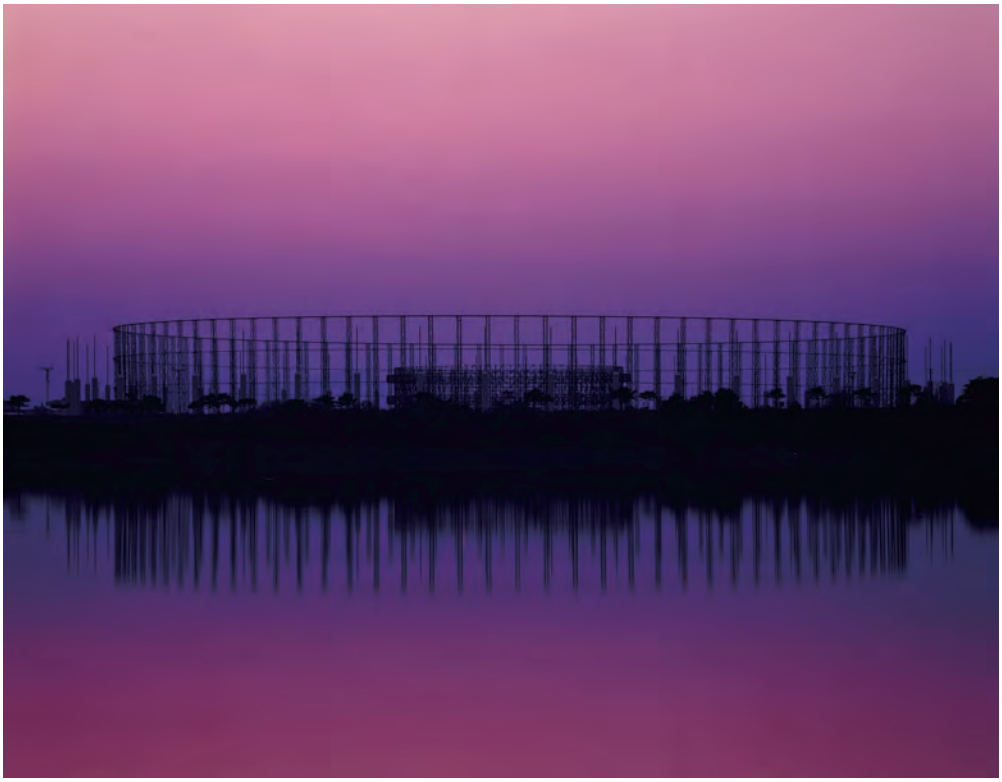
なごや文化情報

2018
7・8
July / August

No.381
NAGOYA
Cultural
Information

随想／二宮咲子（声楽家）
視点／名古屋ボストン美術館の閉館
この人と／久田勘鷗（能楽シテ方観世流）
いとしのサブカル／前田裕介（名古屋サブカルチャー合唱団 Coro Animony 代表兼常任指揮者）



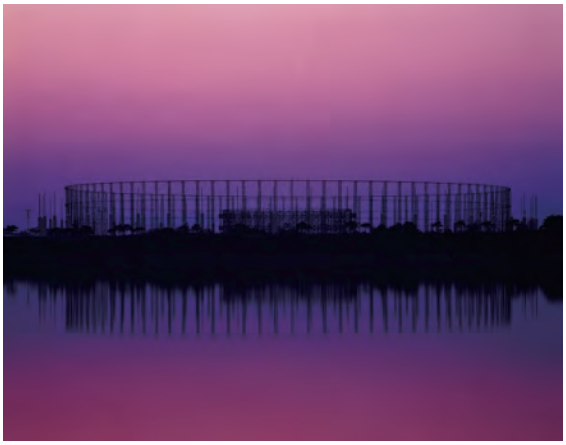
公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2018
7・8
July / August

表紙

作品
ZONE
（1987年／写真）

米ソ冷戦時代に三沢基地にあった無線の傍受用の巨大アンテナ（通称、象の檻）で、2012年に衛星通信などの発達で役割を終えた。現在の情報インフラであるインターネットは象の檻が機能していた当時の軍事通信システムの脆弱性を守る為に考案されたものである。軍事技術の民需転用により、現在は個人の情報発信（SNS）などに利用されており、歴史の皮肉を禁じえない。



伊奈 英次（いな　えいじ）

1957年　名古屋市生まれ
1984年　東京綜合写真専門学校研究科卒業
1987年　第４回東川賞新人作家賞
2009年　さがみはら写真賞
http : //inaeiji.com

Contents

名古屋市民文芸祭　小・中学生の部　受賞作品 …… 2

随想　日本文化に力をもらって
二宮　咲子（声楽家） …… 3

視点
名古屋ボストン美術館の閉館 …… 4

この人と･･･
久田　勘鷗（能楽シテ方観世流） …… 6

ピックアップ
いいだ人形劇フェスタ　～日本最大の人形劇の祭典～ ……10

いとしのサブカル
前田　裕介
（名古屋サブカルチャー合唱団Coro Animony代表兼常任指揮者）……11

おしらせ ……12

「なごや文化情報」編集委員
上野 茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
森本悟郎（表現研究･批評）
山本直子（編集･出版 有限会社ゆいぽおと代表）
吉田明子（人形劇団むすび座制作部長）
米田真理（朝日大学経営学部教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

「2017年　名古屋市民文芸祭」
（第六八回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
俳句の部　受賞作品より　※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆
あかとんぼよそのくにまでとんでいく
名古屋市立大森北小学校トワイライトスクール2年　小林 通瑠

◆市会議長賞◆
十五歳悩める心はかたつむり
名古屋市立神丘中学校3年　橋田 絵子

◆市教育委員会賞◆
えんぴつが短かくならない夏休み
名古屋市立あずま中学校1年　伊藤 麻結

◆市文化振興事業団賞◆
手花火や妹のえくぼくっきりと
名古屋市立滝ノ水中学校2年　藤谷 光怜

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆
通学路秋の葉私に声かける
名古屋市立小坂小学校5年　鈴木 舞

◆中日賞◆
蝉の死も花が散るより美しく
名古屋市立天白中学校2年　原田 美祈

随想

日本文化に力をもらって

にのみや　さきこ
二宮　咲子（声楽家）
愛知県岡崎市出身。国立音楽大学声楽科卒業。「蝶々夫人」蝶々さん役でデビュー。
オペラやコンサートなど様々なシチュエーションで演奏活動を展開。また近年は後進の指導にも力を注ぐ。
平成23年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞。

2011年の夏、イタリアのトッレ・デル・ラーゴにて開催されたプッチーニ・フェスティバル「蝶々夫人」公演。マサチュッコリ湖を背に、3,000を越える席の野外劇場の舞台に初めて立った時は、自分の声も身体もあまりに小さく思え不安を覚えました。

そんな時、心の支えになったのは、日本から船便で運ばれた舞台セットと衣装。それに触れると、日本の空気を感じられて心が落ち着き、きものを身に纏えば背筋が伸び、舞台に立つ勇気が湧いてきました。

公演は陽がしっかり暮れた夜9時半開演。「蝶々夫人」は、結婚式の場面から始まります。よって私の衣装は、頭には文金高島田のカツラ、早替えのきものを付けた上に花嫁の振袖、そして綿がぎっしり詰まった白無垢を着て登場。照明に照らされた純白の衣装は美しく、ステージは一気に華やかになりました。

しかし、これだけ着込めばとにかく暑い。イタリアの夏の気候は日本ほど湿度が高くないとはいえ、暑いものは暑い！ 蒸発の場を失った汗は顔面から吹き出し、相手役も苦笑い。まるでひとりサウナ状態。きものは両足両腕にピッタリと貼り付き、いつもの倍以上の重さを感じながらも最後までやり遂げました。

和装で歌った忘れられない作品がもう一つ。かぐや姫を主役にしたオペラに出演した際、十二単を身に纏い、おすべらかしのカツラを付けて舞台上を駆け回りました。このカツラ、少しでも油断すると重さで首がカクッと後ろに倒れてしまう。必死で頭のポジションを維持した結果、しばらくの間、寝違えのような痛みに襲われたことを今でも覚えています。

きものでオペラを演ずるのは決して楽ではありません。でもきものを身に纏うと、私は舞台上で歌い演じる勇気を与えてもらえている気がするのです。特に海外で歌った時にはそれを強く感じました。

イタリアでの「蝶々夫人」公演から7年経った今、私は三味線を習っています。オペラとは両極にある日本文化、音楽を学ぶことで、自分の立ち位置を知り、それによりもっと力強く、堂々と歌えるようになりたいと思ったからです。自国の文化を学ぶことは、難しくも楽しい時間です。私の三味線の上達具合は亀の歩みですが、邦楽の粋な音楽感を体得した先に、また新たな「蝶々夫人」を表現できたらな、と努力する日々です。

Report 視点

名古屋ボストン美術館の閉館

名古屋ボストン美術館は1999年４月に名古屋財界の肝いりで〈ボストン美術館所蔵の優れたコレクションを恒常的にわが国に紹介する唯一の施設〉（同館ウェブサイト、以下同様）として設置されたが、財政的に継続が困難との事由で2018年度以降ボストン美術館との契約を更新せず、美術館としては今年10月８日で閉館することになった※。功過相半ばする同館の20年間を振り返ってみたい。

（まとめ：森本 悟郎）

名古屋ボストン美術館開館と経営危機

名古屋ボストン美術館の名が世間で知られるようになったのは、’91年10月、名古屋商工会議所常議員会での名古屋ボストン美術館設立準備委員会（委員長・加藤隆一名古屋商工会議所会頭）設置決定が報じられてからである。その後 ’95年８月、運営財団の設立発起人会が開催され、同年11月、財団法人（現・公益財団法人名古屋国際芸術文化交流財団）設立が認可されて伊藤喜一郎発起人代表が理事長に就任、翌月ボストン美術館と名古屋ボストン美術館設立契約が調印される。契約上「姉妹館」という位置づけだが、妹はもっぱら姉から展示品を借り受けるばかりで自らコレクションは持たなかった。展示品の選定は姉の専権事項であり、妹は開館後20年にわたってさまざまな名目で姉に高額な寄付をすることとされていた。ちなみに同財団へは地元財界から美術館設立・運営資金が寄付され、愛知県と名古屋市からは財団設立の基本財産の半分（２億円）と経営安定化基金30億円が拠出された。

名古屋ボストン美術館

’96年２月、名古屋ボストン美術館が入居する金山南ビル建設が始まり、’98年完成。翌 ’99年４月17日に「モネ、ルノワールと印象派の風景」展で開館する。展示会場は２フロアに分かれており、’04年３月までは４階が企画展示室（後のボストンギャラリー）、５階が「エジプト・ギリシア・ローマ 古代地中海世界の美術」を展示した常設展示室（後のオープンギャラリー）だった。この開館記念展には45万人の入館者を集め、初年度の入館者数は59万９千人を数えるというまずは順調な滑り出しだった。

ところが開館２年目からは入館者数が当初予測の33万人を下回るとともに、想定外の低金利となったため基金の利子で運営するという目算が外れ、すでにこの年度末時点で、継続的な運営につき厳しい見方が示されていた。その一対策として ’03年に学芸員の給与を減額するとともに学芸部を廃止するという暴挙にでる。本件の後、財団を退職した元学芸員は財団を相手に、給与及び退職金を減額したことを違法だとして裁判を起こし、勝訴している。このような事態の出来（しゅったい）はひとえに財団の責任であるが、それは当初の段階において、美術ならびに美術館運営の専門家が関わることなく進めてしまったこと、そして財界主導でありながら経済予測が甘く、美術館経営に無知だったことによる。やがて財界がそれまでに拠出した75億円は払底し、20年契約の半ばで閉館との憶測もでた。

転換点

’05年小笠原日出男氏が財団理事長に就くと、美術館存続に向けて財団が動きはじめた。財団はボストン側と交渉して後半10年間の支払金37億円を17億円に減額させるとともに、展示内容に一定程度名古屋側に裁量が与えられ、独自の企画も可能となった。財源面では地元財界に35億円の追加支援を、県・市へは取り崩しが禁止されていた経営安定化基金から各10億円の拠出を要請し、これらにより ’19年３月末までの運営が可能となった。ソフト面では翌 ’06年６月学芸部が復活し、同年10月馬場駿吉氏が館長に就任した。

馬場氏はもともと医師で、俳人としても知られている。名古屋市立大学の教授職を定年で退官した後、名古屋市美術館参与を務めたことはあっても、いわゆる美術館運営の専門家ではない。しかし、名だたる美術コレクターとして作家と作品をリスペクトし、見識高く美術・舞台芸術批評に健筆をふるい、何より利用者として美術館を知悉していることから、まことに適切な人選だった（それは氏が引き受けることになる労苦を差し引いての話ではあるが）。馬場氏が最初に行ったのは館長室を廃し、自らの机を学芸部に置いたことである。

この頃から名古屋ボストン美術館は変わった、と筆者には感じられた。まず会場に足を運んだときの遇され方が変わった。それはスタッフのことばや表情やしぐさに現れた。馬場氏によれば学芸員間で互いにサポートする態勢が自然にとれているという。そればかりか、理事企業からの出向職員も派遣職員も美術館への愛を抱いて従事しているのだと。館長の欲目があるにしても、スタッフ全員がチームとしての自覚を持っているのは素晴らしいではないか。

改革後の展覧会

ボストン側との交渉で展示に関する規制が緩和されたことにより、名古屋独自の企画や提案によって展覧会の幅も奥行きも広がったようである。

’08年「クロード・モネの世界」展にあわせて「駒井哲郎 銅版画展」をオープンギャラリーで開催。これは馬場氏のコレクションによるものである。’09年、開館10周年記念として「ゴーギャン展」が開かれ、門外不出といわれたゴーギャンの最高傑作『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか』が展示された。これは、馬場氏が最も感慨深かった展覧会とのことだ。’10年「時の遊園地」は国内作家によるグループ展で、画家・櫃田伸也氏をアドバイザーに名古屋独自の企画展として開催。現代美術にやや弱いボストン美術館のコレクション展を補完するかのようだった。’11年「ジム・ダイン」展も話題を呼んだ展覧会で、作家も来日して愛知県立芸術大学で対談を行っている。’12年「ボストン美術館 日本美術の至宝」展はあまたある同館日本美術選りすぐりの展観だったが、わけても修復を了えて世界初公開となった曾我蕭白『雲龍図』は話題を呼んだ。作品の修復には膨大な経費がかかるものだが、蕭白作品に限らず名古屋からの寄付がそんなところで役立っていたことは知っておいていいだろう。’13年オープンギャラリーでの「すくいとられたカタチ FORMS IN FLUX」展は芸術国際交流協定を結んでいるボストン美術館芸術大学と愛知県立芸術大学の教員6人によるグループ展で、〈日米文化交流の進展に寄与する〉という同館の目的にも適合するものだ。「日本画を彩った巨匠たち」展はボストンギャラリーだけを使った企画展だが、これは北海道立近代美術館のコレクションによるものだった。’17年のMOA美術館所蔵品による「吉田博 木版画展」、三菱東京UFJ銀行（現・三菱UFJ銀行）貨幣資料館所蔵品による「歌川広重 東海道五拾三次展」も同様で、経費節減のための学芸員の苦心が窺われる展覧会。’15年「ダブル・インパクト 明治ニッポンの美」展はボストン美術館と東京藝術大学のコレクションによる競演で、開館当初には考えられなかった企画である。

最後はハピネスで

開館以来、名古屋ボストン美術館にはボストンから多くの名品が出陳され、重要な作品はほぼやってきた。これらの多くはボストン美術館に足を運んだところで、必ず展示されているわけではない。それを延べ450万人を超える人たちが名古屋で鑑賞することができたのは「幸せ」なことだった。

名古屋ボストン美術館最後の企画展が7月24日から始まる。題して「ハピネス ～明日の幸せを求めて」。展覧会は〈日常における幸せ、四季の美しさを愛でる幸せ、100年前のボストニアンたちが夢見た桃源郷（ユートピア）、現代アートにみる幸せの表現〉を5章立てで、〈ボストン美術館の所蔵作品から、古今東西の人間が求めてきた「幸せ（ハピネス）」について思いを巡らせ〉るもの。〈これまでの展覧会でやって来た懐かしい作品の数々に加え、本展覧会のために修復された曾我蕭白の幻の襖絵《琴棋書画図（きんきしょがず）》も〉出品される。

無謀ともいえる思いつきから生まれ、〈恒常的〉にならないまま閉じてしまう名古屋ボストン美術館ではあるが、高水準の作品展示を通じて幸福な気分を味わった市民の数は少なくないはずだ。その「記憶」がある限り、人々の中にこの美術館は生き続けるだろう。

記録集も刊行されるとの由。同館がこの地にもたらしたものを後代に伝えることは重要だ。閉館後の施設再利用案は未定らしいが、他に転用しづらい構造ゆえ、文化発信の火を絶やすことのないよう、新たなコンセプトに基づいた展示施設として生まれ変わることを筆者は願っている。

ウィリアム＝アドルフ・ブーグロー《兄弟愛》1851年、Gift of the Estate of Thomas Wigglesworth, 08.186

曾我蕭白《琴棋書画図》右隻（※修復前）江戸時代、Fenollosa-Weld Collection, 11.4511

Photographs © Museum of Fine Arts, Boston

※名古屋ボストン美術館を運営する公益財団法人名古屋国際芸術文化交流財団の解散は2019年3月末日。

■本稿執筆にあたっては名古屋ボストン美術館館長の馬場駿吉氏ならびに四日市市立博物館館長・名古屋ボストン美術館特別顧問の吉田俊英氏に取材し、適宜「名古屋ボストン美術館ホームページ」「平成16年4月23日判決言渡　平成14年（ワ）第5455号、平成15年（ワ）第2441号　賃金等請求事件」等を参照した。

この人と…

能楽シテ方観世流

久田 勘鷗さん

“表現”するシテ方

久田勘鷗（前名 久田徹二）さんの能を一言で評してください、と問われたら、多くの方が「かっこいい」と答えるのではないだろうか。大きく華麗な動きと、よく通る声。若手と称された時代から、鮮烈な印象の舞台でファンの心をつかんできた。

昨年は、新たな本拠として「名古屋能シアター 久田館能舞台」を西区幅下に設け、その管理運営団体「一般財団法人 能 姫町財団」を立ち上げるなど、ホットなニュースに事欠かない。とても4ページの紙面では足りそうにないため、制約の多い能の演技において、勘鷗さんならではの“表現”はどう生み出されていったかに焦点を当ててお届けしたい。

（聞き手：米田 真理）

能楽師を志した子方時代

勘鷗さんの父は、能楽師・久田秀雄さん［1913ー1984年］だ。秀雄さんは名古屋観正会（のち久田観正会）を主宰し、戦前・戦後の名古屋能楽界を牽引したシテ方の一人である。

シテ方の家に生まれた勘鷗さんが跡を継いだのはごく当然のようだが、実は、勘鷗さんは次男である。長男の舜一郎さんも能楽師ではあるが、大倉流の小鼓方、つまりお囃子を担当する演者として、関西を拠点に活躍しているのだ。

勘鷗さんによれば、自分が跡を継いだのは、父・秀雄さんの意向だったという。もともと秀雄さんは、長男の舜一郎さんに対しては、能楽師以外の道を目指してほしいと考えていた。舜一郎さんも父の意を汲み勉強に励んでいたのだが、高校在学中に大倉流の家元から誘われたのがきっかけで、そのまま小鼓方の道に進んだのだという。

さて、勘鷗さんは、幼少期からシテ方の能楽師を目指し、父のもとで謡や仕舞の稽古を始め、4歳で初舞台を踏んだ。能の中には、子どもが担当する子方という役を設定しているものがある。勘鷗さんは、父がシテをつとめる舞台をはじめ数多くの能に出演した。

能〈花筐〉の子方として。昭和34年２月15日、名古屋観世会（熱田神宮能楽殿）。写真には写っていないが、シテは観世流家元・元正師だった。

一言で子方といっても、声変わり直前の大きな子どもが担当する演目もあれば、ごく幼い子どもにふさわしいものまでさまざまだ。幼少期の勘鷗さんの思い出のひとつに、〈隅田川〉がある。この能の子方は、能が始まる前に、後見が運ぶ「塚」の中に入って舞台に出る。子方にとっては、すっぽりと大きな箱をかぶせられて歩く感覚になるのだが、そのまま終盤まで塚の中に閉じこもったままだ。約1時間30分の能の、あと残り10分のところでやっと声を発し、塚の外に歩み出ることができるという過酷な役である。幼い勘鷗さんは、大きなアメ玉を二つ与えられ、それを真っ暗な塚の中で大事にしゃぶりながら、健気に出番を待っていたという。

そんなつらい思い出もあるが、ご自身を「好奇心旺盛な行動派」と評する勘鷗さんにとって、舞台に立ち、観客の視線を集めるのはとても楽しかった。子方として活躍するうち、将来は能楽師として身を立てていこうという意志は、いっそう強くなっていった。

忙しかった書生生活

子方としての活躍が終わるころ、勘鷗さんを突き動かし始めたのは、親元から早く独立したいという思いだった。つまり、書生に行きたい、ということである。

書生というのは、一般に内弟子と呼ばれる制度と似ているが、心持ちが異なると勘鷗さんは言う。書生とは弟子のほうから頼み込んで、先生の家に“居させてもらっている”もの。プロの能楽師になるには、必ずしも書生を経験しなければならないわけではなく、ただ自身の修行になるよう、望んで家に置いてもらうのだ。

勘鷗さんは中学校3年生のとき、卒業後は書生になろうと決心した。行き先は、父・秀雄さんの師家にあたる神戸の上田家である。書生の生活のことなどよく理解せぬまま、ただ飛び込もうとしていた勘鷗さんは、高校に進学することなど考えもしなかった。

だが、師匠となる上田照也さん[1926ー1984年]の計らいで、指定された高校に進学することになった。その時はよくわかっていなかったが、その高校には、照也さんの夫人の父が勤務していたことから、勘鷗さんに目が行き届くようにとの親心によるものだった。

高校生と書生との二重生活は、かなり忙しかった。朝は、舞台の拭き掃除と、玄関周りの掃除や水やりを済ませてから登校した。下校後は、風呂焚きが決まった仕事だった。このほか、先生が出かけるときにお伴したり、反対に留守番したりと、その都度さまざまな仕事があった。

神戸能楽会の重鎮である照也さんのもとには、すでに二人の書生がいた。現在、神戸を中心に活躍している下川宜長さんと、山田義高さんである。年齢は山田さんのほうが上だったが、同じ時期に書生となっていたため同輩格だった。そこに、唯一の後輩として加わった勘鷗さんは、先輩のやることを見ながら、書生、さらには能楽師としての心得を身につけていった。若いころ生活を共にしたこのお二人とは、今も親交が深く、心の距離が近いと感じるそうである。

生活のすべてが修行

意外なことだが、書生としての生活の中には稽古の時間は組まれていなかった。むろん、舞台に立つ機会があれば、その演目について指導してもらうことはある。だが、素人弟子とは違って、謡や仕舞について「次はこれを覚えなさい」といった、段階的な課題を与えられることはなかった。

「結局、生活のすべてが“修行”なんです」と勘鷗さんは振り返る。素人弟子の稽古の様子や、人の稽古風景を見聞きして、あくまで自主的に稽古する姿勢が大切なのだ。特に、師匠の舞台にお伴する機会は重要だった。能の上演中、楽屋側から舞台の様子をのぞき見ることができる、鏡の間（登場人物が舞台に出る直前にいったん待機する空間）や地謡座の背後の御簾には、方々からの弟子たちが群がって舞台を観ていたという。

勘鷗さんの書生生活は12年間続いた。当時はこれが平均的な長さだったが、現代では大学卒業後に書生になる場合が多く、また、受け入れる師匠側にもさまざまな事情があって、5年間ぐらいが普通になっているそうだ。

12年間のうち後半の7年間は、先輩である下川さん、山田さんが独立したため、一人での書生生活だった。師匠の舞台やお出かけのお伴のほか、舞台で使う装束類の出し入れや、季節ごとの虫干しなど、すべて一人で担当していた。そうした仕事を通して、将来こんなふうに舞ってみたい、と自分が立つ舞台をイメージしていたという。傍からは窮屈そうに見える書生時代だが、実は、“表現”する能楽師としての勘鷗さんを育む重要な時間となったのだ。

若手時代の評価

勘鷗さんは1974年、27歳のときに独立し、中部や関西を中心とする舞台活動が始まった。新進気鋭のシテ方として、勘鷗さんへの評価は高まっていく。30代半ばの1983年には、大阪文化祭賞奨励賞（能・狂言部門）を受賞。さらに1989年には、「第18回 月刊神戸っ子ブルーメール賞」の舞台芸術部門を受賞した。主催者である月刊『神戸っ子』同年3月号に掲載された「選考座談会」には、次のように記されている。

30代のころ、舞台の打上げでのスナップ。

佐野：大阪文化祭参加で久田徹二が〈野宮〉を舞った。華麗、品位に厚味が出てきました。

（…中略…）

岡田：受賞者は受賞が転機となって活躍し伸びています。（…中略…）〈野宮〉に賛成です。今後が楽しみですよ。

佐野：〈俊寛〉に続いて明石での〈融〉そして〈野宮〉で勉強しています。では能の幽玄と花・風姿美しく重厚さもでてきた観世流久田徹二にさしあげましょう。これでまた一つ花が咲きましたね。

＊「佐野」は佐野漣箕氏（元神戸新聞取締役文事部長）、「岡田」は岡田美代氏（演出家）。

この選考評からも、当時の勘鷗さんへの期待がいかに大きかったかがうかがわれる。そして、その期待に応えるかのように、勘鷗さんの活動もますます充実。1990年には名古屋市芸術奨励賞を受賞し、名実ともに若手を代表する存在となっていった。

公演会の立ち上げ

勘鷗さんの演能活動を代表するのが、自ら主催する公演会である。この会は、1985年に「久田徹二・能リサイタル」として発足し、第1回公演の演目は、〈安達原 白頭・急進ノ出・長糸ノ伝〉であった。人気演目〈安達原〉に演出のバリエーションである小書（こがき）が3つも付いている。特に「急進ノ出」は、後シテの登場する際の囃子が、通常は［出端（では）］のところ、［早笛］に代わるというもの。例えて言うなら、［出端］は早歩きの速度だが、［早笛］は全速力で舞台に駆け込んでくる感覚である。こうした躍動感のある強い能こそ、勘鷗さんの能の真骨頂と認めるファンも多い。

同会は1998年から「久田勘鷗の会」、2011年から「久田観正会」と名を改めながら今日まで続いている。勘鷗さんにとって、自らの思い描く能を実践する場となっている。

若い日の勘鷗さんは、時として“冒険”を試みることもあったようだ。その際、何よりありがたかったのは、師匠である上田照也さんの姿勢だった。実は、師匠の耳にはしばしば、勘鷗さんについて「ああいう舞い方はまだ早い」「生意気だ」といった苦言が届いていたそうだ。だが師匠は、その都度「本人ができるものなら、やらせてあげたい」と答えてくれていたという。本人が選んだ演目で会を催し、舞い切るだけの力があるのならば良いという姿勢を師匠が貫いてくれたおかげで、勘鷗さんは、能の“表現”を追求し続けることができたのだった。

能の“表現”とは

何かと制約の多い能において、演者に可能な“表現”とはどのようなものだろうか。

「能というのは、決まった型を“つとめる”もので、

その点で能楽師は、いわゆる“役者”とは違います」と前置きしたうえで、勘鷗さんはこう語る。「その中で、表現というものを意識し、自由さを見出していくことができると思うのです」。

例えば、〈俊寛〉。主人公・俊寛は、絶海の孤島に独り置き去りにされることになり、堪えきれず泣いてしまう。このとき通常は、舞台に座り込み、うつむいて両手で目を押さえる。「モロジオリ」と呼ばれる型である。ところが勘鷗さんは、うつむくのではなく、両手で目を押さえ、ほんの少しのけぞって顔を上に向けるのだ。まさに、悲惨な運命を知り、天を仰ぐ心。男が感情を抑えられずに号泣するとしたら、どんな動作になるか考えた結果、生まれた型だった。

このように、この役ならこうするはずだ、と探求していくうちに、勘鷗さんならではの型、動きが編み出されていった。地獄の鬼は、より強く。空中を翔る天狗なら「欄干越え」(橋掛りから欄干に足を掛け、舞台へとジャンプする)。かつて、屋外で上演された〈賀茂〉では、雷神が天に帰る表現として御幣を放り上げるのだが、それはもう、宇宙を目指すかのように高く昇っていった。

こうした他の追随を許さない演技を、筆者は観客へのサービス精神だと捉えていた。だが、それは勘鷗さんから優しく否定されてしまった。「能はお客様に媚を売っちゃいけない芸能だからね」。この役ならこうするはずだ、と考えると、自然に役のほうが自分に一体化する。すると、おのずと舞台の上で自由になれるのだという。

40代のころ、舞囃子〈野守〉。小鼓は兄の舜一郎さん。

あくまで、能は“つとめる”もの。そのベースがあってこその、かっこよく、華やかで、上品と評され続けた勘鷗さんの能になるのだろう。

能〈安宅〉のシテ・弁慶。ワキ・富樫：高安勝久師。撮影：杉浦賢次。
(名古屋能楽堂定例公演平成22年度6月特別公演)

“表現”の追求は続く

勘鷗さんへのインタビューの間に、舞台では息子の勘吉郎さんによる名古屋市立大学の学生への稽古が始まった。勘吉郎さんは現在、東京で観世流家元・観世清和師の書生となっているが、たまたま帰ってきていたのだという。

そこで、能を“表現”することについて、勘鷗さんは若い勘吉郎さんにどう伝えたいか、うかがってみた。勘鷗さんは、少し厳しい顔で「当然、基本をきっちり稽古してほしいですよ。まずはそれからです」とおっしゃった後、微笑んでこう付け加えた。「でも、若いからといって、萎縮してはいけないんじゃないかな」。

思い出せば、30年近く前、筆者自身が学生能でお世話になったときも、生意気盛りの学生に対して勘鷗先生は、能を愛好する者同士という姿勢で接してくださっていた。大御所の雰囲気漂う現在も、能の将来について思い巡らす表情は、むしろ若者よりも若々しい。

「この秋、〈道成寺〉を舞うんだよ。赤頭でね」。ベテランにつきものの、重い「白頭」ではない。主人公の鬼性をクローズアップした「赤頭」である。前シテ・白拍子と後シテ・鬼女をどう“表現”するか、勘鷗さんの頭の中では、着々と練られているのだろう。勘鷗さんの“冒険”が、果てしなく続くことは間違いない。

ピックアップ

歩行者天国公演

いいだ人形劇フェスタ　～日本最大の人形劇の祭典～

毎年夏に長野県飯田市で日本最大の人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」が開催されます。このフェスタのコンセプトは、「みる、演じる、ささえる。わたしがつくるトライアングルステージ！」。人形劇を観る側（観客）、演じる側（人形劇人）、支える側（実行委員、ボランティアなど）の三者が一体となって運営しています。国内外で活躍するプロの劇団から、アマチュア、学生劇団までが一堂に会し、飯田市内が人形劇一色に。例年8月上旬の6日間開催され、市内を中心とした約120ヶ所で480ステージもの公演が行われ、延べ5万人が観劇。日本国内のみならず、海外も含め約300劇団、1,700名の人形劇人が毎年飯田に集まります。

このフェスタでは、人形劇を観る人も、演じる人形劇人も、ボランティアスタッフも、皆が参加証であるワッペン（700円）を購入し、参加者全員でフェスタを支えます。そのワッペンをつけていれば、一部の有料公演を除き、すべての公演を何度でも観ることができます。また、ホール、公民館などでの公演だけでなく、神社やお寺、保育園や学校、歩行者天国になった道路など、飯田市とその周辺の町村のあらゆる場所が人形劇の公演会場となります。上演スタイルも現代人形劇から伝統人形芝居までさまざまであり、素朴で温かみのある作品から世界最高レベルの作品まで、多種多様な人形劇と出会うことができます。公演以外にも大規模なパレードやワークショップなど楽しい企画が盛りだくさんです。

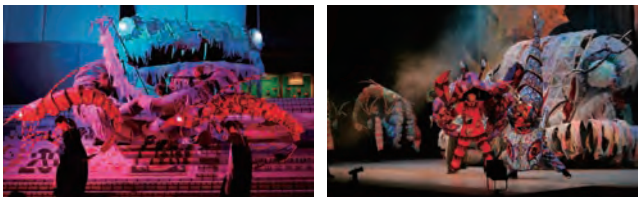
人形劇人によるパレード

飯田市は長野県南部に位置し、名古屋から車で約2時間。距離的な近さもあり、プロ・アマ含めた名古屋の数多くの人形劇団がフェスタ開始当初から継続して参加してきました。学生やアマチュア劇団にとって、フェスタは大切な公演の場であると共に大きな学びの機会となり、フェスタで得た経験を持ち帰り地元での公演活動に生かしています。また、2015年には「愛知の人形劇」という特集が組まれ、「先進的な表現活動の試み」「新たな表現を発掘」「愛知のプロ・アマチュア劇団」「愛知の伝統人形芝居」「愛知の人形美術家の紹介」など、さまざまな角度から愛知の人形劇団や活動にスポットがあたり、30団体が参加。41作品、64公演を行いました。

フェスタ事務局の北林さんは「名古屋からは毎年たくさんの方が上演や観劇参加してくださってとてもうれしい。また人形劇は、幼児・子ども対象の作品創りが一般的だけれど、名古屋には愛知人形劇センターがあり、人形劇の枠を飛び越え演劇の側からの斬新なアプローチなど、多様な活動をしているのが特徴的で非常に面白い」とおっしゃいます。

この夏、“人形劇のまちが生まれて40年”を記念し、「世界人形劇フェスティバル」が開催されます。フェスタ期間も8月3日～12日と通常より長く、何百年も大衆に愛されてきた娯楽的な作品から芸術的で先鋭的な作品まで、世界各国から約30劇団が参加。また、50名以上の飯田市民が関わった巨大人形劇「さんしょううお」も上演予定で、例年以上にグレードアップされた「いいだ人形劇フェスタ」の開催が期待されます。

（Y）



飯田市民による「巨大人形劇 さんしょううお」

いいだ人形劇フェスタ実行委員会事務局
長野県飯田市高羽町5－5－1 飯田文化会館内
ＴＥＬ：0265－23－3552　ＦＡＸ：0265－23－3533

いとしのサブカル

名古屋から発信！サブカルチャー合唱の魅力

名古屋サブカルチャー合唱団 Coro Animony 代表兼常任指揮者

前田 裕介（まえだ ゆうすけ）

広島県出身。崇徳高校グリークラブに入部したことをきっかけに合唱を本格的に学ぶ。学生時代には幾つかの団体で合唱指揮をしていたが、就職と同時に活動を停止。その後、活動再開の場として自ら Coro Animony（コーロアニモニー）を結成する。好きな声優は渡部優衣さんと山口立花子さん。

名古屋サブカルチャー合唱団Coro Animonyは、名古屋で唯一の、アニメソングやゲーム音楽、VOCALOID楽曲などのサブカルチャー楽曲“だけ”を取り扱う全国的にも珍しい混声合唱団です。

「どうしてサブカルチャー楽曲だけを歌う合唱団をつくったのか」。答えは単純で、私が“オタク”だからです。学生時代にアニメやライトノベルにすっかり魅了され、30歳になった今でもアニメやゲームが大好きですので、その作品に使用されている楽曲も好きになってしまうのは必然と言えるでしょう。「自分の好きな楽曲を合唱で演奏したい」と、合唱を経験した人なら一度は考えたことがあるのではないでしょうか。多くの人が知っているような有名曲ならともかく、私のような“オタク”がやりたい曲というのはどうしてもマイナーな曲になりがちで、なかなか演奏機会には恵まれません。それなら、「そういう曲だけを歌う合唱団をつくればいい」ということで、Twitter を中心にメンバー募集を開始したのが2015年12月。1ヶ月もしない内に30名ものメンバーが集まり、現在は約70名のメンバーが所属しています。サブカルチャー合唱は、自分たちの好きな楽曲を自分たちの手によって新しい魅力を引き出せることができるため、聴いたお客様から、「原曲よりも好き」なんて嬉しいお言葉をいただくこともあります。

私は創立時から一貫して、所属メンバー100人を目指そうと言い続けています。好きな作品や歌いたい曲が共通のメンバーでいくつかの有志団体を立ち上げ、定期演奏会の場で披露する。そうすれば全員での演奏とはまた違った特色が生まれ、定期演奏会がまるで合唱祭やジョイントコンサートの様になり、お客様へサブカルチャー合唱の魅力をもっと届けられるのではないだろうか。そういう想いから、まずはメンバー数を増やして、そのチャンスをつくろうという意味を込めて、目指せ100人と言い続けているのです。もちろん現在もメンバーは募集していますので、興味をもった方は公式ウェブサイトよりお問い合わせいただければと思います。

名古屋市で開催している定期演奏会以外にも、これまで東京都でのミニコンサートの開催、他団体とのジョイントコンサートの開催、各地の合唱祭への出演など、演奏の機会があれば積極的に参加しています。今年は新たな試みとして、第25回愛知県ヴォーカル・アンサンブルコンテストへ有志2グループが出演して、そのどちらとも銀賞を受賞しました。もちろん、演奏した曲はアニメソングを中心とした楽曲です。また、2019年3月下旬にはフィンランドのオウル市で開催される、オウル日本文化祭への出演も決まっており、サブカルチャー合唱団としては初めての海外公演となります。少しでも多くの人にサブカルチャー合唱の魅力を発信していくために、これからも活動を続けていきます。

東京都で開催された Coro Animony Summer Concert の様子

Ballet Around The World!!

～民族音楽で舞う魅惑のバレエダンサー～

名古屋を中心に活動する振付家とダンサーが、バレエ団の枠を超えて集結する夢の公演!
エキゾチックな雰囲気あふれるインドネシアの伝統音楽ガムランや情熱的なアルゼンチン・タンゴをはじめ、6種の民族音楽を用いて新たな作品を創作します。

日時

2018年9月28日(金)18:30～
29日(土)14:00～

会場

名古屋市青少年文化センター
(アートピアホール)

チケット

【日時指定・自由席】 一般 3,500円
友の会会員・障がい者等 2,800円
学生 2,500円
※未就学児入場不可。

振付
アイリッシュ／ガムラン
神戸 珠利
(佐々智恵子バレエ団)

振付
アルゼンチン・タンゴ／フォルクローレ
古瀬 陽子
(フリー)

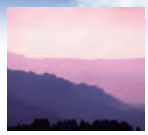
振付
アフリカンドラム／ジャズ
松村 一葉
(川口節子バレエ団)

チケット取扱い

▶名古屋市文化振興事業団チケットガイド　TEL:052-249-9387(平日9:00～17:00／郵送可)
そのほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。

▶チケットぴあ〈Pコード:487-139〉　TEL:0570-02-9999
サークルK・サンクス、セブン-イレブンでもお求めいただけます。

環境にやさしい企業を目指します



わたしたちの会社ではISO14001を取得、
印刷にかかわる制作から配送まで、トータルで環境に
やさしいシステムを構築、環境負荷低減印刷を目指します。

中日高速オフセット印刷株式会社
〒462-0847 名古屋市北区金城四丁目3番19号
TEL(052)914-1711　FAX(052)914-7913
http://www.c-offset.co.jp

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。

ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ
20Hz ← → 20kHz
この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

A&V PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400　FAX/052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵305
TEL(052)508-5095　FAX(052)508-5097　URL http://www.mane-pro.com
業務内容　①舞台の企画・制作マネージメント　②イベントの企画制作
③芸術団体のコンサルティング　④舞台・イベントの運営

平成30年6月25日発行(隔月1回25日発行)通巻381号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP http://www.bunka758.or.jp/